

コラム 「きのうきょう」

サイエンスの秋

学生記者 田中佑樹(理工学部4年)

秋色づいた葉が風に漂う季節になってきた。先日、木枯らし1号が吹いたとのことで、秋の深まりを感じるのと同時に、大学生活もあと半年もないということに少し感傷的になっている。

読書の秋にちなんで、読みたい本を紹介したい。

最近読んで感動したサイエンス本で、ジュディ・ダットン作『理系の子—高校生科学オリンピックの青春』だ。

サイエンス本と聞いて敷居が高いと感じてしまうかもしれないが、まったくそんなことはない。専門用語はほとんどなく、それでいて科学の楽しさ、何かを一生懸命に突き詰める素晴らしさを感じる。

オバマ米大統領は2009年に「次の10年で理科と数学の成績を世界の平均レベルからトップレベルに引き上げる」と宣言し、「科学者と技術者は、人々の見本として、スポーツ選手や芸能人とともに肩を並べるべきだ」と発言した。

日本では理系離れが問題になっているなか、この本を読むと、科学者がヒーローとして扱われていないことに疑問を感じるはずだ。

インテル国際学生科学フェア(ISEF)と呼ばれる高校生科学オリンピックが舞台である。ISEF

ではアメリカの大手半導体メーカーのインテルが4億ドルもの資金を出して、世界各地で選出された1500人以上の高校生を戦わせる。大会に出場する高校生たちは、天才ばかりではない。

アリゾナ州ナヴァホ族の少年は、廃物の山から手に入れたラジエーターや空き缶を用いて、喘息の妹のために太陽エネルギー由来のヒーターを開発した。妹思いの少年の中学時代の成績は「C」のオンパレードだったそうだ。

一方、少年院にいるものはシャープペンや鉛筆を危険物とされて、貸与は授業中に限られる。そんな状況でも、惑星データを解析して地球外生命体の可能性に関する研究を行った。

『理系の子—高校生科学オリンピックの青春』には、こうした少年少女たちの熱いドラマがいくつもちりばめられている。

ISEFで勝つことで、若者たちは可能性にあふれた世界を見ることができる。

「できる、できるぞ」

この気持ちが世界を変えていく原動力になるのだ。

●
本書にこんな一節がある。

「月に最初の一步をしるした宇宙飛行士ニール・アーム

ストロングを陰で支えていた技術者たちの平均年齢は26歳だったそうだ。1961年にケネディ米大統領が月を人を送ると宣言して、この計画に参加したときの技術者の平均年齢は18歳だったことになる」

大学生のわれわれと同じくらいの年齢なのだ。私は現在、卒業研究の真っ只中で来年から大学院に進学する。

自分と同年代の技術者たちの偉業を胸にしまい、小さな成功を積み重ね「できる、できるぞ」を増やしていきたいと思う。

